

縄文道通信第72号
温故知新シリーズ
—縄文土器発明の偉大さ—

縄文道—武士道—未来道

一般社団法人縄文道研究所
Copyright by Jomondo
Kenkyuujo

——縄文土器発明の偉大性——

縄文土器と日本陶磁器文化の系譜 4回シリーズ

「30の発明からよむ日本史」日経ビジネス人文庫発行 京都大学理学部教授 池内 了 監修 の 書籍の、日本史での最古で最高の発明 第一位は縄文土器と述べている。

最近の光ファイバー、自動改札機、カラオケ、青色発光ダイオードまで日本人は「創造と工夫の国」であったとの視点で述べている。「日本で見つかった縄文土器は世界最古級で、世界四大文明の起こった時期よりもはるかに前に造られていたことは間違いない。食料の保管や加熱調理によって縄文人の食生活を劇的に変化させただけでなく、すなわちムラの出現に繋がった」

2021年7月27日に北海道、東北3県の17か所の縄文遺跡がユネスコの世界遺産登録された。この中の青森県大平山元遺跡から発掘された縄文土器が炭素検査法で約16,500年前に造られた世界最古の土器と云われる。日本は縄文天国と言われる様に北の北海道から南の沖縄、まで約90,000箇所もの縄文遺跡が存在し、これら遺跡から発掘された縄文土器の種類は約70種類と多様である。又縄文土器の特徴を三つに要約すると以下の通りになる。

- 1・北海道から沖縄まで各地域で夫々独自の土器を造っていた。
地域性が夫々の縄文人の生活感を現している。
2. 歴史的に約13,000－14,000年と長期に続いた文化の為時代によって、形状、装飾性、用途 含め多様性を有している。
3. 縄文土器の固有の芸術性、造形性、装飾性、神秘性 が独自の迫力で歴史を超えて伝わってくる迫真力がある。

世界の考古学者、文化人類学者、歴史家が、縄文土器の独自性と芸術性を賛歌しているが、世界的な文化人類学者でもあり、哲学者のレビー・ストラウス博士の以下の印象記を紹介したい。

「日本に3度 来日した知日派の、20世紀最高の文化人類学者は縄文土器と最初に出会い、驚異の鑑賞眼で、土器が有する固有の

造形感覚に心打たれた。大変な芸術性を有すると評価したのだ。更に博士は土器の制作の裏に隠された、縄文人の知恵の高さを見抜いて縄文文化の素晴らしさと日本文化全体を高く評価した。」

日本の戦後の経済的にも厳しい昭和26年11月7日、天才的画家、岡本太郎は上野の博物館で縄文土器と出会った。岡本太郎は、縄文土器の発する凄まじいエネルギーと迫力に圧倒され「これは、何だ」と叫んだ様だ。以来、岡本太郎は縄文文化にのめり込んで、日本中の縄文遺跡を訪ね、独自の縄文文化感を形成した。1970年の大阪万博の「太陽の塔」は縄文文化の偉大さを表出した代表的作品と言われる。

筆者の縄文土器との出会いは32年前に遡るが劇的であった。商社マンとして豪州のパースに駐在時、現地の陶芸クラブにて「四次元との対話—縄文土器論」という岡本太郎のみずゑに寄稿した文章に出会ったことだ。日本のバブルの絶頂期1989年10月7日に上野の博物館で縄文土器に出会い、その迫力に衝撃を受けたのだ。同時期に世界的な陶芸家、人間国宝の島岡達三氏の笠間の工房を訪れ、彼の代表作「縄文象嵌」を頂戴したのも同時期だ。時が経つのは早いもので「縄文文化にハマって」32年が経ってしまった。

縄文土器と対面した時、おのれの心と体に衝撃を与えた、何者かを常に問い詰めてきたが、今言えることは日本の瀬戸の陶祖、加藤藤四郎景正の末裔としての「血が騒いだ」のだと思う。縄文土器が何故偉大で、重要であるかを、日本のもの造りの原点に立ち返って考えたい。

縄文土器の作成をもの造りの原点から考えると、火の使用と土の加工、そして水をたくみに使う技術の集結であることだ。これは、現代科学技術文明を支える半導体と同じだ。半導体は土の中の主成分のシリカ(SiO₂)を取り出して純粋なシリカ Si のみ、99,999999%まで純度を高めた結晶で作成される。

縄文土器の作成工程を現代に蘇らせる実験考古学という学問がある。この学問の研究者に依ると、縄文人は16,000年前に大変高度な、地質学、化学、物理学といった学問は存在しないが、科学的工程を経て

土器を造っていた。以下工程の概要だ。

1. 胎土の選定と「素地土一きじど」を造り、混合物－黒鉛、雲母、滑石粉、黒曜石、植物の織物を混ぜて、原料の土が出来る。
2. 装飾過程－様々な文様を付ける為の道具を作り、道具を巧みに使用して、複雑な文様を、土器に施す技術。道具は施文具と呼ばれるが、へら、竹、棒、櫛歯等 様々な用具を使用する。色の付いた彩文土器も造られていたが、主に赤と黒である。赤の原料はベンガラと朱、黒は煤と炭が使用されている。
3. 焼成過程が最終工程である。土器を乾燥させて、硬く割れない、水漏れがない様に高温で焼成する技術を身につけていた。野火焼で、松、竹、なら 等の材木を集めて、火お越しをして、様々な土器を焼成して乾燥させて出来るのだ。

筆者も縄文土器作成 経験があるが、野焼きの段階は、最もエキサイティングだった。

以上の様に、縄文土器の制作過程を実験考古学の視点から観察すると粘土採集－素地土－成形－整形－施文－乾燥－焼成 とまさに縄文人の叡智の結晶であることが理解できると思う。

縄文土器の作成で獲得してきた、もの造りの基層が、日本人が世界に誇る「匠の技」に連綿と繋がっていると思う。

匠の技は、日本人のあらゆる面で、継承、発展していくが、今回は土器、陶器、磁器 文化に継承され、世界の冠たる陶磁器文化国家になっていたか系譜を紹介したい。

これは半導体や、世界を席卷するウォッシュレット文化にも継承されていくのだ。

完

参考資料:

30の発明から読む日本史 池内 了監修 日経ビジネス
縄文土器ガイドブック 井口直司 著 新泉社
考古学ハンドブック 小林 達雄 著 新書館
世界史を変えた新素材 佐藤 健太郎著 新潮選書
日本陶磁器の世界的影響力 加藤 春一 講演資料

2012年 丸の内朝飯会 上智大学マスコミソフィア会